

# 平成二十年度研修旅行（万葉旅行）報告

荒 金 良 美  
堀 籠 泰 世  
松 本 奈 々

今年度の万葉旅行は奈良——明日香・当麻・斑鳩への旅である。池田先生と助手の周さんと二十余名の学生とで、三月十五日から十七日の二泊三日の行程で実施された。万葉歌の舞台となった地や、万葉歌人でもあった天皇・諸皇子たちの陵墓を巡り、また、その当時に花開いた仏教美術に触れる。一昨年から授業で『万葉集』に親しみ、今年に池田先生のゼミで卒業論文に取り組む私達にとって、実りある素晴らしい三日間となった。

## 三月十五日（一日目）明日香

宿泊先であるホテル日航奈良に集合し、貸切バスで一路、明日香に向けて出発した。バスが進むにつれ、車窓は見慣

れた街の景色からだんだんと大和の原風景へ。まるで時を超えたかのようにいにしえを思わせる自然や田畑、昔ながらの民家の佇まい。この残された「原風景」こそ、奈良の魅力であり、私が奈良を愛する理由のひとつでもある。先日から行程の説明を聞き、友人たちと語らううちに、本日の最初の見学地である甘樫丘にバスが止まった。

甘樫丘は明日香を一望できる丘で、現在は国営飛鳥歴史公園として整備されている。標高はわずか一四八メートルなのだが、途中から登るペースが下がり、少しの息切れ。翌日に予定されている二上山登山が思いやられたが、頂に着けば、眼下に広がる景色に疲れを忘れた。この場所には蘇我蝦夷・入鹿の邸があったと伝えられている。滅びの前

の榮華のひとつときに「明日香の里、大和三山をもわが手にしたようだ」と誇らしげに同じ景色を眺めたであろう蘇我の父子に思いを馳せた。

次に向かったのは万葉文化館である。地下の「歌の広場」では、古代の市の様子が再現され、それぞれに表情豊かな人形の前に立つと、何事か語りかけられているようで、まるで自分が万葉びとになった心地がした。一階の日本画展示も素晴らしく、『万葉集』の世界をより身近に感じることができた。時間の関係でゆっくりと見学出来なかったのが残念であったが、ミュージアムショップでしっかりとお土産を買い、万葉文化館をあとにした。

高松塚は、他の古墳には類を見ない美しい壁画装飾で有名な古墳である。しかし、近年、カビによる劣化、漆喰の脆弱化が著しいということで問題になり、肝心の古墳は保護のため、被いに囲まれている状態であった。復元された壁画は資料館で見学することができたが、もし壁画が失われてしまったら本当に惜しいことである。文化財を守り、後世に伝えてゆくことの難しさと大切さを考えさせられた。いつか生の飛鳥美人と四神を見られる日に期待し、未だ明かされぬ被葬者を思い、次の見学地へと向かう。

のどかな風景を楽しみながら歩いて行くと、天武・持統両天皇の陵墓に着いた。さすがは「飛鳥の明日香」を創つ

たとも言える両天皇だけに、威厳たっぷりにどっしりと座している。ここで二年もの長きにわたる殯宮が営まれたのかと、改めていにしえの人々が踏んだ土地に、自分が今立っていることの素晴らしさを実感した。今でも天武天皇の命日には、天皇が発願した薬師寺の僧侶たちによって天武忌が行われているそうである。

続いて向かったのは、鬼の雪隠・鬼の俎という石造物。なるほど、鬼が迷い込んだ旅人を捕らえ俎の上で料理し、満腹になった後は雪隠で用を足したという伝承にも肯ける形状と大きさなのだが、実際は古墳の石室の一部であったという。他にも、明日香には亀石や猿石、酒船石など、不思議な石造物が現在するのだが、ほとんどは用途がわかっていない。神秘と謎が尽きる事はない。

次に飛鳥駅から徒歩でマルコ山古墳へと向かう。この古墳の被葬者には、天智天皇の皇子・河嶋皇子の名が挙げられている。ここに来るまで、すぐ近くにも民家が並んでいた。このあたりに住む人々にとっては、身近に古墳や遺跡がある風景が当たり前なのだろうか。東京では本当に考えられぬ風景である。

そして、最後に向かったのは、天武・持統天皇の皇子であった草壁皇子の陵墓の有力な比定地である東明神古墳と、現在草壁皇子の正式な陵墓として定められている岡宮天皇

陵である。田畑を抜け、民家を抜け、森へと向かう道。薄暗い神社の階段を登れば、境内にひとつの塚。東明神古墳である。もとは天武・持統天皇陵に次ぐ規模の八角墳であったそうだが、草木が生い茂り当時の原型を忍ぶことは難しい。被葬者とされる、二十八歳という若さで皇太子のまま薨去した皇子のことを思うと、日暮れ前の薄暗さも相まって、物悲しさがこみ上げた。一方の岡宮天皇陵は、他の天皇陵と同じく玉垣と鳥居を備えた立派なものであった。岡宮天皇とは草壁皇子が死後に贈られた天皇号である。この一日だけでもいくつかの古墳・山陵を見たが、この他にも有名なキトラ古墳を含め、被葬者が確定している墳墓の方が少ないという。いつかすべてが明かされる日がくるのだろうか。

バスへと戻る帰り道、広がる田畑の向こうの山に、太陽が沈みかける。きつと一三〇〇年前と変わらぬ、山に沈むその夕陽も、東京では決して見ることの出来ないものであった。

宿に戻った後、奈良大学の上野誠先生と万葉文化館の大館真晴先生をスペシャルゲストにお迎えして、ホテル内の一室で、万葉旅行の恒例行事「万葉百人一首大会」が行われた。「高市皇子」「持統天皇」「大津皇子」「草壁皇子」の四チームに分かれてのトーナメント。ネーミングがなんと

も万葉らしく、この時点で気分が盛り上がる。一回戦は「持統天皇チーム」対「高市皇子チーム」と、「大津皇子チーム」対「草壁皇子チーム」。「大津皇子」対「草壁皇子」とは歴史通りの因縁の対決であるが、歴史は覆され、「大津皇子」が「草壁皇子」に勝ち、「高市皇子」が「持統天皇」に勝った。決勝では「高市皇子」と「大津皇子」が戦うこととなり、結果、「高市皇子」は弟「大津皇子」に勝って優勝。また、三位決定戦では「持統天皇」が息子「草壁皇子」に勝つという歴史的な大波乱にて幕を閉じた。

万葉旅行一日目はあつという間に過ぎ、今日の旅を振り返りながら、きたる二上山登山に備えるために、早めに眠りについた。

### 三月十六日（二日目）当麻

一日目と同様に貸切バスに乗り、古代の主要な道であった竹内街道と、相撲発祥の地であるけはや塚・けはや座へと向かった。竹内街道は、飛鳥の都と難波とを結ぶ重要なルートであったという。一見、普通の道であるが、その昔は交通の要としてたくさんの人々やたくさん荷車などが行き交っていたのだろう光景が目に見えた。

次に、けはや座を見学。『日本書紀』に記された、相撲の始祖とされる當麻蹶速の墓といわれるけはや塚が近くに

あり、館内には蹶速に因んで、相撲の番付表や化粧回しなど、数多くの展示品があった。土俵が設置されており、土俵上で行司や力士の真似をしたり実際に相撲を取ったりして、相撲に親しんだ。館長さんの詳しいお話をうかがい、相撲が国技と言われる由縁を深く理解することができた。

けはや座を後にして、少しバスに揺られて當麻寺へと向かう。當麻寺は民俗学者で国文学者であった折口信夫の著書『死者の書』に登場する中将姫ゆかりのお寺である。中将姫は、『称賛浄土経』一千巻の写経を行い、深く帰依したとして仏の力を借り、一夜にして蓮糸により約四メートル四方の曼陀羅を織り上げたとされる人物である。国宝に指定されている當麻曼陀羅は、拝観したものはレプリカであったが、とても緻密に織り上げられており、まるで本物であるかのような美しさであった。きつと中将姫が織り上げたものはさらに美しかったのだろうと想像しながら荘厳な空気の中で曼陀羅の前に立つと、自分の周りだけ切り取られたかのような、何処か神聖な場所に立ったかのような心地を覚えた。曼陀羅の他にも国宝・弥勒仏座像や、重要文化財の四天王立像など多くの文化財を見学し、仏教がどれほど人々の支えだったかを感じた。先生が伽藍配置について説明して下さったのを胸に留めつつ、本堂、金堂・講堂、奥院を見て回った。最奥に位置する浄土庭園はボタン

園となっているそうだが、まだボタンの時季には早かったので、今度はボタンが満開の頃に行ってみよう。

その後、再びバスに乗り込み、二上山の麓にある大津皇子の墓かとされている鳥谷口古墳を見学した。石棺が納められているというが、鉄格子がはめられた中に組み合わせが全く合っていない石が単に積まれただけという印象を受ける粗末な古墳であった。大津皇子は、兄であり皇太子でもあった草壁皇子に謀反を企てたとして処刑された万葉第二期の歌人である。大津皇子は、葬られてのち二上山へと移葬されたという。謀反人であったとするなら殯を行うことは許されず、立派な陵に葬られることも許されないはずだから、墓が粗末であったとしても不思議はないが、少し奇妙な古墳だと感じた。当初遺体を葬った場所から石棺ごと鳥谷口古墳に移されたのだとすると、組み直されたはずの石の不自然な様子から、当時、よほど緊迫した状況にあったのかもしれないことが想像された。

そのような当時の人々の足跡を追うように、今回の研修旅行の最大の目的地である二上山の登山口に到着すると、大伯皇女が二上山の移葬の際に詠んだ「うつそみの人にある我や明日よりは二上山を弟背と我が見む」という歌が記されたプレートがあり、姉の、弟を想う心が二上山を前に一層強く感じられた。二上山はその名の通り二つの山が寄

り添って一つの山を形成しており、雌岳・雄岳と呼ばれる。まず標高の低い雌岳（四七四メートル）に登り、馬の背と呼ばれる雌岳・雄岳を繋ぐ鞍部を通り、雄岳（五一七メートル）に登るコースを取った。雌岳山頂の日時計付近にて昼食を取った後、馬の背を経て雄岳の山頂へ。雄岳山頂には葛木坐二上神社があり、少し下った所に大津皇子の墓があった。かつて、二上山は雌岳と雄岳の間に夕日が沈む神聖な山としてされていた。そこにも謀反人である大津皇子が移し葬られたということは、何かしら後ろ暗い部分があったことを匂わせる。大津皇子が崇つたため、それを鎮める為に二上山に移葬したとの説もある。大津皇子が崇り神になったというのは『薬師寺縁起』に記されている出来事で、平安時代に定着した御霊信仰の礎になったのだという。謀反は叔母・持統天皇による策略であったとする説が今では有力であるが、無実で死んでいったのなら崇り神となることも肯ける。鳥居と「大津皇子二上山墓」と刻まれた石碑があるだけの寂しい墓に、友人と共に大津皇子の辞世歌とされる『万葉集』巻三・四一六番歌「百伝ふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ」を奉納し、下山した。約三時間の登山であった。標高はさほど高くないとはいえ、なかなか険しい山道ではあった。しかし、雌岳・雄岳に登り切り、大津皇子の墓を目の当たりにして、

遙か昔の人物達の様々な生き方に想いを馳せることができたと思う。

下山してホテルまで戻った後、近鉄奈良駅前のビル二階にある「月日亭」を会場に、懇親会が催された。一人一人改めて自己紹介をし、万葉百人一首で最も札を多く取った学生への賞品が授与された。そして、美味しい食事と共に、先生や周さんと、また先輩後輩もその間柄を気にすることなく、懇談して交流を深め、登山で疲れた体を癒した。

### 三月十七日（三日目）斑鳩

最終日は法隆寺・中宮寺を拝観した。

まず、聖徳太子で有名な法隆寺を訪れた。法隆寺は現存する世界最古の木造建築物で、飛鳥様式の金堂や五重塔を中心とする西院、天平様式の夢殿を中心とする東院とに分かれている。中学校の修学旅行でも訪れたことはあったが、大人になってからもう一度じっくりと拝観すると、建築様式や仏像の細部を見る余裕ができて、とても楽しめた。金堂は修理が終わっていて、釈迦三尊像が見やすい構造になっており、時間をかけて正面と後側を見て回ることができた。五重塔を回り、大宝蔵院で八頭身のすらりとした百濟観音像や釈迦の本生譚から舍利供養図、須弥山図、捨身飼虎図、施身聞偈図を描いた玉虫厨子を見ることができた。

教科書で見たものを実際に見ることができた嬉しさと、千年も昔のものが自分の目の前にあることの神秘を感じた。

続いて法隆寺の隣にある中宮寺へ向かった。聖徳太子が母穴穂部間人皇后の菩提を弔うために建立されたこととされ、また国宝で有名な如意輪観世音菩薩半跏像や天寿国曼荼羅繡帳がある。如意輪観世音菩薩半跏像は、半跏思惟像とも呼ばれ、一本の木から作られたとは思えないほどの精密さと柔らかさがあった。木造らしい柔らかな雰囲気とアルカイックスマイルに心が癒される気がした。繡帳の実物を見ることはできなかったが、天寿国曼荼羅繡帳は太子薨去後に妃橘大郎女が浄土の理想を刺繡させたもので、年月を経るうちに破損し現在も修復中とのことだった。

\* \* \*

三日間の万葉旅行は無事に行程を終えた。

奈良のいろいろな場所を巡り、当時の文化や歴史に触れることができた。また、その場所の一つ一つが文学に関わりがあることに驚き、文化や歴史と文学には密接な関係があるのだと改めて実感することができた。現地の方々や先

生の説明により、文学だけでなく、その裏にある歴史にも興味を持つことができた。

さらに、この旅行を通して、学年の壁を超えて学生同士の交流を深めることができた。万葉旅行委員として葉を作成したり一人の学生として万葉百人一首に夢中になったりと、大学生活の良い思い出を作ることができた。

最後になりましたが、私たちを引率し文学や歴史に触れる機会を与えてくださった池田先生、周さん、本当にありがとうございました。

(平成二十一年度国文学科四年生 荒金 良美

同 堀籠 泰世  
同 松本 奈々)

二上山 雌岳にて



法隆寺

